

# 白いくま

小川未明

青空文庫



そこは、熱い国でありました。日の光が強く、青々としてい  
る木立や、丘の上を照らしていました。

この国の動物園には、熱帯地方に産するいろいろな動物  
が、他の国の動物園には、とうてい見られないほどたくさんあ  
りました。寒い国にすんでいる動物は、なかなかよく育たな  
いものとみえて、あまり、数多くはありません。その中に、一  
びきの白いくまが、みんなから珍しがられ、またかわいがられて  
いました。

なにしろ、木立の柔らかな葉が、きらきらと光つて、いつかは  
あめのように溶けてしまひそうにみえるほどの熱いところであり

ましたから、寒い、寒い、寒い、氷山の上ですんでいるしろくまを飼つておくことは、まったく容易ではなかつたのでした。

大きな水たまりを造つて、そのなかへ、氷のかけらを投げいれておきます。くまは、熱さにこらえられないので、幾度となく、その水の中に浸ります。そして、バシャバシャと水をはねかえして、冷たい氷水を浴びたときだけ、わずかに、自分の生まれた北の故郷にいた時分のことを思い出したり、また、ちよつと、その当時の気持ちになつたのであります。

あちらには、どんよりとして、いつも眠っているような海が見えました。その海は、おしで、盲目なのだつた。なぜなら、ものすごい叫びをあげている波は、みんな口を縫われてしまつて、魚

のうろこのように、海はすっかり凍っていたからであります。そして、氷山が、気味悪く光つて、魔物の牙のように鋭く、ところどころに、灰色の空をかもうとしていたからです。

脂肪のたくさん、むくむくと毛の厚いしろくまはそこを平気で歩いていました。また、氷が解ける時分になれば、険しい山の方へのこのこと帰ってゆきました。広い寂しい天地の間を自由にふるまうことができたのでした。

それが、いまどうでしょう。熱い、熱い、知らない国に連れてこられて、狭い鉄のおりの中へいれられてしまったのです。はじめのうち、腹だたいやら、残念やらで、じつとしていることができませんでした。かんしやくまぎれに鉄の棒を折り曲げて、

外そとへ暴あばれ出だしてやろうと、何なんど度となく、そのおりの鉄てつ棒ぼうに飛とびついたりかされません。

力ちからの強つよいくまは、いままで、こんなからだななかに、体からだの中なかにあつた力ちからをすつかり出だしたことはなかつたのです。なぜなら、その必ひつ要ようがなかつたのでした。いま、いくら力ちからを出だしても、すべてが無む効こうであることを知しつたときに、くまは、はじめにんげんて人にんげん間が、自じ分ぶんより智ち慧えのある動どう物ぶつだということをも知しつたのでした。

「これは、もう、力ちからずくでいってはだめだ。」と、くまは考かんえまがした。

彼かれは、しばらく、人にんげん間がなにをしようと、するまだまだに黙だつて、見みていようと思おもいました。くまは、人にんげん間は、けつして、これい

じよう  
上なんにもしないということを知つたのであります。

まいにち、しろぬのあたま  
毎日、白い布を頭にかぶつた、あおいろの服を着た男が、なまに  
生

く  
肉の切れを持つてきてくれました。くまは、それを食たべながら、

「なんというまずい肉にくだろう。」と、かんが  
考えたのです。ぴちぴちは

ねている生き物いのものを自分じぶんの手てでしつかり押おさえつけて、あたま  
頭あたまがらガリ

ガリとかじるのにくらべては、歯はごたえがなかつた。かれ  
彼は、もう

一度ひと氷ひょうざん 山うえの上うへで、逃にげてゆこうとする動物どうぶつを追おいかけてい

つて、それをつかまえて、食たべてみたいと思おもいました。

食たべ物は、まあ、これでもしかたがないが、暑あついものには、こま

つてしまいました。すると白しろい布きれをかぶつた男おとこが、おほ  
大きな氷こおたまりの塊かたまり

を水みずの中なかへ投なげ込こんでゆきました。くまは、ザブリと躍おどり込こんで

浸ひたりました。浸ひたったかと思おもうと、また躍おどり上あがりました。ちよつと、その瞬しゅん間かんだけいい気持きもちがしたのでした。

「人間にんげんは、なんていうけちな奴やつだ。あの海うみはすっかり凍こつてい  
るじゃないか？ また氷ひょう山ざんの氷こをいくらでも持もつてくればい  
いじゃないか。それなのに、これんばかりしか、氷こをここへは持も  
つてこない。こんなけちんぼうで、そのうえ、力ちからの弱よわいくせに、  
よくあんなに強つよい棒ぼうを造つくつたものだ。いや、あのときは俺おれがどう  
かしていたのだらう。この力ちからで、あんな細ほそいものがへし折おれない  
はずはないのだ……。」

白しろいくまは、ふいに、そんなことが頭あたまに浮うかぶと、どつと暴風あらし  
のように、鉄てつの格子こうしに飛とびついて破やぶろうとしました。しかし、や



つぱりだめでした。

けれど、このすばらしい勢いで、見物人がみんなびつくりして、声をたてました。くまはそれをせめても痛快がったのであります。

そんなようなことも、このくまが、ここにきたはじめのうちのことでした。しまいには、このおりのなかにも、人間にも馴れてしまいました。人間は思ったよりはやさしかったからです。

この国の人々は、寒い、寒い、北の国にすんでいる白いくまをひじように珍しがりました。いったこともない、想つても、ほとんど想像されない北極に近い世界を考えることは、なんとなく神秘的であり、また、うつとりとさせられるからでした。

「くまや、おまえは、そんな遠い、寒い国で生まれたのかい。親もあり、兄弟もあつたのだらう。どうして、人間などに捕らえられて、こんなところへきたのか？」と、見物の中にはこんなことをいった学校の生徒もありました。

月日はたつて、はじめは、子ぐまであつたのが、だんだん年を取りました。その間に、白いくまは、芸というほどのことでもないが、見物に向かつて、頭を下げたり、体を左右に揺すつてみせるようなことを覚えしました。体を左右に揺するのは、うれしい感じを表すことであり、頭を上下に動かすのは、なにか食べるものを欲しいという心を示すものだということは、見物にもわかつたのであります。

「くまが、あんなに、頭あたまを下さげているから、チョコレートをや  
 ましょう。」といつて、見物けんぶつしていた女おんなの人は、日ひがさをか  
 げてオペラバッグを開ひらきながらいいました。

この国くには、ココアや、コーヒーの産地さんちでありましたから、チ  
 コレートのおいしいのが、またたくさんありました。くまは、チ  
 ヨコレートが大好きだいすでした。

動物園どうぶつえんの白しろいくまが、チョコレートが大好きだいすだといふことが、  
 みんなに知しれわたりましたから、見物けんぶつにくる女おんなの人ひとや、子供こどもた  
 ちが、くまにチョコレートを持もってきてやりましたので、あんな  
 り食たべ過すぎて、くまは夜よるも眠ねむれなかつたことがあります。

しかし、くまも、いつしかすっかり、この国くにの生せい活かつに慣なれて

しまいました。そして、いまではあまり生まれた国のことなどを  
 思い出さなくなつたようです。境遇というものは、しぜん

その性質までも変えてしまうのでした。

子供の時分に、この熱い国の動物園に連れられてきた白いく  
 まは、もう年をとつてしまいました。

ある日のこと、やしの樹の木蔭で、青い着物をきて、白い布を  
 頭に巻いた係の男が、大きなパイプで、いい香気のするたばこを  
 すばすばと吸つて、石に腰をかけて、考え顔をしていました。

そこへ、一人の紳士が、令嬢をつれて通りかかりました。

この紳士は日ごろから、この動物園の男を知っているとみえま  
 して、にっこりと笑つて、顔を見合わせると、

「このごろ、しろくまはおとなくなりましたね。」といいました。

パイプをくわえていた男は、青い煙を吹きながら、

「いまも、しろくまのことを、私は、考えていたのです。このごろは、あんまり水の中へも、たくさんは飛び込まないし、暴れまわったということもありません。まったくおとなくなりましたよ。それは、まことにけっこうなことなんですが、困りましたのは、あんまりチョコレートを食べたもので、歯がすっかり、もうだめになつてしまつたんです。」と、男は、答えたのです。

紳士と令嬢は、思わず笑いました。

「じや、人間にかみつく心配がなくていいじゃないか？」と、

紳士しんしはいいました。

パイプをくわえた男おとこも、からからと笑わらいました。

「まったく、そうです。あんな鉄格子てつごうしのおりに入れておくひつよ必要ひつよはありませんね。」といいました。

チヨコレートを食たべたために、歯はがなくなってしまうたしろく

まの話はなしが新聞しんぶんに出でると、いままでよりいつそうこの無邪気むじやきなく

まの人氣にんきが募つつたのであります。毎日まいにち動物園どうぶつえんへ見物人けんぶつにんが押お

し寄よせてまいりました。白しろいくまは、いままでよりか、もつとに

ぎやかによろこなったのを喜よろこびました。そして、みんなの方ほうを向むいて、

頭あたまを上下じょうげに振ふつたり、体からだを左右さゆうに揺ゆすつたりしました。「チヨコ

レートをやつてはなりません」と、札ふだが立たてられたにかかわらず、

あいかかわらずオペラバッグから、女たちはチョコレートを出して、  
投げてやりました。

歯のなくなつたくまを、いつまでもおりの中へいれておく必要がないという説も出ました。動物園では、立て札に書いてあるような、猛獣の性質がなくなつてしまうと、この白くまの処分に困りました。このことを、あるりこうな香具師が聞き込みました。彼は、あまり金を出さないで、白くまを手に入れたのであります。

香具師は、白くまを長く、その内に入れてあつたおりからつれ出して、動物園を去りました。足のつめは切り、危ないような歯はみんな取つてしまつて、白くまを自由にさせてやりまし

た。くまは、これを苦痛くつうと思うどころでなく、広々ひろびろとした世界せかいへ出でられたのを喜びよろこました。もう、このごろは、生まれうれた国の夢くんにゆめも見みることがなければ、氷こおりうえの上を駆かけて遊あそんだ子供こどもの時分じぶんのことも忘わすれてしまつて、オペラバツグを見みるとチョコレートなを投なげてくれないかと、目めを細ほそくしているのであります。

香具師やしは、白しろいくまに、紅あかい日ひがさを差さして踊おどることなどを教おしえ込こみました。白しろいくまは、物覚ものおぼえのいいほうではなかつたけれど、後足あとあしで立たち上あがることや、ダンスのまねなどをするようになりなりました。

この南みなみの国くにの熱あつい午後ごごのこと、町まちのはずれの広場ひろばでいろいろと手品てしなや、唄うたや、踊おどりなどをしてみせている興行物こうぎようものがありまし



た。その中なかには、この白しろいくまのダンスも混まじっていました。くろんぼが笛ふえや、らっぱを吹ふき、鉦かねなどをたたくと、白しろいくまが、赤あかと緑みどりのまじった布きれを腹はらに巻まいて紅あかい日ひがさを差さしながらダンスをはじめたのです。このとき、みんなは、手てをたたいてはやしみました。

「あれが、チョコレートで歯はをなくしてしまつた、動物園どうぶつえんにいたしらくまだよ。」と、子供こどもたちはいいました。

香具師やしは、広場ひろばに、響ひびきわたるような声こえで、

「これは、北ほつきよく極ほうの方に生うまれたしらくまでです。かわいそうに、こんなに遠とおいところへきていますが、また、みなさまにひどくかわいがられてしあわせ者ものです。動物園どうぶつえんから出だされたとき、生うま

れた国へ帰してやろうと思いましたが、くまのいうのに、こんなに年を取って、歯がなくなつて、国へ帰るより、やはりみなさまにかわいがられて、チョコレートをもらつて食べているほうがいいというのです。……どうぞ芸は、未熟ですが、遠いところからきていると思つてかわいがつてやつてください。」といいました。

この熱い国から、世界のいたるところへ、はるばる輸出されるココアの罐や、チョコレートのブリキ製の箱の上に、くまが日がさをさして、やしの木のある野原で踊っている絵があります。

北極の方近くまでそれはゆくであろうが、これは、このしろくまを描いたものです。

☆ 香具師（かぐし）——縁日（えんにち）や祭り（まつり）などで、  
見せ物（みせもの）などを興業（こうぎょう）する  
人（ひと）や、品物（しなもの）を売（う）る人（ひと）。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月20日発行

初出：「良友」

1926（大正15）年10～11月

※表題は底本では、「白《しろ》いくま」となっています。

※初出時の表題は「白い熊」です。

※本文末の注記の「一〇八ページ」は省略しました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年10月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白いくま

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>